

心理面接におけるカウンセラーの質問の 志向性が面接過程に及ぼす影響

—ロール・プレイによる実験的検討—

坪井 さとみ

I. 問題と目的

カウンセリングにおいて、カウンセラーの質問はきわめて重要なものである。質問の仕方の如何によって、カウンセリングの進展は大きく左右される(玉瀬, 1991)。面接の雰囲気や流れが、一つの質問によって、大きく変わってしまうことは、日常的な臨床場面でもよく経験されることである。

しかし、質問がどのような意図や目的で用いられ、実際にはどのような内容の応答が得られるのか、カウンセラーはどのような質問をしたらいいのかという疑問に具体的に答える技法論はまだ少ない。

従来は、カウンセラーからの質問とは、過去の情報を集めたり、クライアントの問題を明確にし、その問題や病理を取り除くためだけに用いられると考えられてきた。しかし、それに加えて、近年、質問の新たな効果が注目され始めている。それは、病理や欠陥ではなく、解決や未来に焦点を当てた質問をすることによって、クライアントの認識枠の変換を起こしたり、クライアントの強さを引き出し得るといふ、介入としての効果である。未来という異なるコンテキストを導入することで、クライアントに新しい問題解決の枠組みを与えるのである。これは、構成主義や短期療法という立場の考え方である。I. Kim Berg (1991) は、質問の持つ治療的影響力の大きさを強調する。治療者がどんなことを、いつ、どのように質問するかが、面接の進展や、カウンセラーとクライアントの関係を大きく左右するのである。従って、カウンセラーは、質問の持つ影響力の大きさを十分に認識し、その力を治療のために、最大限有効に活用すべきなのである。

カウンセラーの質問の新たな影響力、特に解決や未来に焦点を当てる質問の影響について、臨床的、実際の立場にたった研究は、次のようなものがある。P. Penn (1991) は、家族などとの合同面接の際に、円環的質問が有効であることを示した。K. Tomm (1987) は、Reflexive Questioning (将来を与える質問) が、新しい解決の展開を促すことを見いだした。W. J. Gingerich ら (1988) は、セラピストが、問題の例外や解決後について質問することによって、クライアント

がそれについて話し始め、しだいにクライアントの問題に対する認識が変化していくことを示唆した。W. H. O'Hanlon ら (1989) は、クライアントが解決の可能性や、自身の力の存在を確認するために、カウンセラーが“前提を含んだ質問”を用いることが効果的であると主張した。わが国では、カウンセラーが解決を志向した質問の仕方を工夫することで、クライアントの認識枠の変換が起こることを検討した富田 (1992) の研究などがある。

しかし、これらの研究は、事例をあげて、その質問の有効性を示したものがほとんどであり、十分な実証的研究が蓄積されているとはいえない。また、事例検討以外の研究でも、個々の質問を1つずつ取り出して、質問紙の形で検討するものが多く、本来の面接の流れや状況(文脈)を無視している。従って、未来・解決に焦点を当てた質問が、いかに有効であるのか、さらに吟味していく場合、事例をひとつひとつ検討することも、もちろん大切であるが、より実際の面接に近い形で、かつ実験的に条件を統制した上、その有効性や特質を検討する基礎研究が必要であろう。

故に、本研究は、カウンセラーの質問には、過去の問題を明確にする過去志向と、未来や解決を目指す未来志向があると定義し、その志向性が異なることによって、面接過程にどのような影響を与えるのかということ明らかにするために行われた。実験は、面接の相互作用のプロセスを損なわず、かつ、条件を統制することを考慮し、ロールプレイ場面を分析することが計画された。そして、①カウンセラーとクライアントの各発話頻度及びその関連について、②クライアントの面接に対する印象、③評定者の面接に対する印象という3側面から、質問の志向性の影響を検討していくことを目的とした。

II. 方法

対象は、カウンセラー役として11名の大学院生、クライアント役として33名の大学生で、カウンセラーの質問の志向性の違いによって、受容的応答群、過去志向質問群、未来志向質問群の3群に分けられた。ロールプレイで話し合われる話題は、クライアント役が自分自身に関することから提供し、主に自分の性格や将来、現在の生

活について、または友人、家族関係についてのことであった。ロールプレイは、実験室において、カウンセラーとクライアントが1対1で個別に、約30分間の時間をかけて行われた。1名のカウンセラーは、3名のクライアントに対して、1回目の面接には、すべての受容的応答の面接を行い、1週間後に行われた2回目の面接には、受容的応答の面接、過去志向質問の面接、未来志向質問の面接という、3名にそれぞれ別の面接を行った。志向性の違う3面接の方法は、事前にカウンセラー役に対して、説明、訓練が行われた。面接の様子はすべてビデオに録画された。面接終了後、クライアント役は、面接の印象を、質問紙に評定した。

面接を録画したビデオは、すべて逐語録に直され、訓練された3人の評定者によって、カテゴリーに従い分類がなされた。また、評定者の面接の印象に対しても、評定が行われた。発話カテゴリーは、Gingerichら(1988)、Hillら(1978)を参考に作成され、合計20カテゴリーである。

Ⅲ. 結果

分析1：カウンセラーとクライアントの各発話をカテゴリーに分類し、その出現頻度を3群間で比較した結果、志向性の違いによって、それぞれ出現頻度の高いカテゴリーが異なることが示された。受容的応答群及び過去志向質問群において、クライアントの発話は問題の説明や簡単な応答が大半を占めるが、未来志向質問群では、変化・例外の発話が増加した。このことは、カウンセラーの質問の志向性と、クライアントの発話には、何等かの関連があることを示す。心理面接は、カウンセラーとクライアントの相互作用によって進展していくプロセスであることが確認された。

分析2：質問の志向性の違いによって、クライアントの面接に対する印象がどのように異なるのかについて検討した。面接の印象評定のための15項目は、因子分析の結果、1因子性であると判断され、「クライアントの面接の印象」尺度と命名された。この尺度の得点を、3群間で分散分析により比較したところ、未来志向質問群ほど、よりポジティブ（意欲的、役に立つ、新しい面が見えた、満足、自由）な印象をもたれる傾向が示された。

また、自由記述を比較した結果、受容的応答群では、面接に対する不安、難しさに関するもの、過去志向質問群では、落ち着いた、考えが明らかになったなど、未来志向質問群では、解決に導いてくれた、自分を見つめ直したというものが多く、各群で内容に違いが見られた。

分析3：質問の志向性の違いによって、第3者的立場である評定者の面接に対する印象がどのように異なるのかについて検討した。面接印象尺度（SEQ）22項目と非言語的側面の評定11項目の合計33項目から、因子分析の結果、「面接の雰囲気」「面接の価値」「肯定的感情」「ノンバーバル行動」の4つの因子が抽出された。それらの因子について、3群間で分散分析により比較したところ、未来志向質問群に対して、評定者の印象は、よりポジティブになる傾向が示された。また、カウンセラーとクライアントのノンバーバルな行動も、未来志向質問群でより一致する傾向が示された。

事例的検討：ロールプレイという模擬面接といえども、各面接ごとの差は大きく、統計的な特徴として現れない点も多い。従って、各群において、特徴的なものを取り上げて検討した。その結果、カウンセラーの質問の仕方によって、クライアントの発話や印象が異なることが、内容レベルで具体的に示された。未来志向の質問（前提を含む質問や例外を聞き出す質問）は、クライアントの力を引き出す質問であることが示唆された。また、クライアントのペースに合わせることで、質問を使う場合に、最も重要であることが確認された。

Ⅳ. 考察

今回の実験では、有意差は十分といえないが、質的な相違は見られ、未来志向の質問が、クライアントや評定者の印象に何らかの特別な影響を与えているという傾向が示された。このことは、質問が、従来からの効果だけでなく、面接に対してもっと大きな影響力を持つ可能性があることを示す。今後は、質問の力を治療に最大限活用するためにも、質問の持つ有効性を詳細に検討する基礎研究が必要である。

また、この研究は、質問の有効性を、より実際の面接に近い相互作用の文脈の中で捉えようとした探索的な1つの試みである。このような研究方法は、今後、心理面接場面を分析、検討する際に、有用な情報を提供するといえるだろう。

今後は、熟練した臨床家をカウンセラー役として用いたり、面接へのモチベーションが高いクライアント役を募集するなど、より実験条件を統制し、実験を繰り返していくことが必要である。そして、そこで得られた知見の中から、どのような質問がどのような機能・効果を持つのか、実際の面接に役立つ形の情報として提供していくことが望まれる。